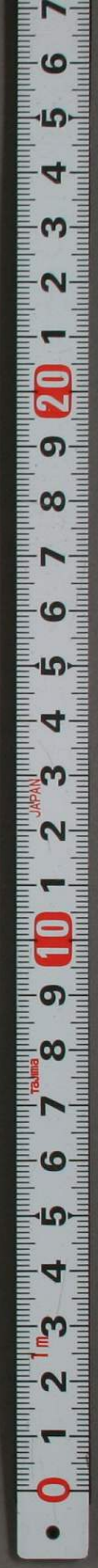


2109  
20



13  
2109  
20



思ひ出せし事あり。予都と出折る。紅梅殿(まご)寄し。小此梅感(ここのうめあはれ)なり。四(よ)都  
 の春の余波(あまなみ)を。東風吹(こちかぜ)を。白(しろ)いとせよ。と戯(たむ)ふ口號(くわごう)し。小其歌(ここのうた)や感(あはれ)なり。  
 山海數百里(さんかいすひゃくり)と隔(へだ)てる。此筑紫(このつくし)まで飛来(とびきた)り。更(さら)不思議(ふしぎ)の中(なか)の不思議(ふしぎ)なり。  
 草木非暗(くさきふはく)と。いふ。守(まも)り。仮初(かりはつ)の歌(うた)感(あはれ)なり。王(み)を慕(まほ)ひて来(き)たり。優(やさ)しき。よ。構(かま)へ。  
 小枝(こえだ)を折取(おと)り。更(さら)ふれ。と。曰(い)ふ。都(みやこ)と出(で)る。ひ。より。今日(けふ)まで。二度(にど)も笑(わら)せ。ひ。更(さら)無(な)し。  
 小(こ)此(この)時(とき)始(は)て。笑(わら)せ。ひ。御(ご)竹(たけ)院(いん)の。色(いろ)あ。ら。れ。る。辰(たつ)音(ね)春(はる)彦(ひこ)公(こう)の。御(ご)詞(ことば)小(こ)  
 就(つ)て。梅(うめ)樹(じゆ)と。主(ま)周(しゆ)て。左(ひだり)見(み)右(みぎ)看(かん)小(こ)美(み)の。紅(こう)棊(き)殿(でん)の。梅(うめ)小(こ)紛(まが)ふ。方(かた)あ。れ。を。感(あはれ)歎(なげ)して。  
 止(と)む。心(こゝろ)あ。れ。下(した)僕(わが)も。も。感(あはれ)涙(なみだ)流(なが)れ。る。是(こゝろ)より。菅(か)公(こう)公(こう)前(まへ)小(こ)信(しん)じて。愛(あい)ま  
 り。ひ。御(ご)夢(ゆめ)去(さ)の。後(あと)神(かみ)小(こ)鎮(ちん)祭(まつり)ま。の。ひ。小(こ)或(ある)人(ひと)此(この)梅(うめ)の。枝(えだ)を。折(お)り。つ。て。御(ご)神(かみ)託(たく)小(こ)  
 たり。け。あ。り。折(お)り。人(ひと)つ。つ。と。宿(やど)の。主(ま)に。す。れ。ぬ。棊(き)の。と。ち。枝(え)を。

と。詠(えい)し。ま。せ。ゆ。ひ。太(たい)宰(さい)府(ふ)の。飛(と)梅(ばい)是(こゝろ)なり。其(その)後(あと)都(みやこ)の。言(こと)便(たやす)小(こ)紅(こう)梅(ばい)殿(でん)の。御(ご)愛(あい)

樹の内梅一夜の中維が枝取ん影がえんすかり櫻が枯果残る只松乃  
かりと安えく菅公嗟歎のひ縁の御歌小曰

梅ととびさうら枯る世の中小松むりごとほれふりたる

斯縁がせのひる小其翌朝庭前一本の松生出す辰音春彦公下の

人又大不怪とくくはふ是も都紅梅殿の御愛樹の松小幹も枝ぶり由

彷彿とれ菅公言上る小公立出て見の人を将是紅梅殿の松小入給

るくもふれを奇異の思ひをたのひ梅とも小朝夕目れせと愛しめて

配所の徒然を慰めり公の御跡を追来れは追松と呼めりその後

世いつ何時も老松と文字と換る斯て延喜三年正月のまつくくは菅公

御異例小染させのひれ辰音春彦大少孩丸郡司泰民部と高嶺

遠近小良医來て御床と勸まり神佛小祈誓して日夜御本復を祈り

それとも墓々其強も見え玉さうなり然小二月の上旬小都小尚置めり嶋

田忠臣下向と配所悉くこれ菅公近き召れ珍く忠臣予が都と出後

朝廷小斐義がたれ主上ハ御安齋小在すやと問せの忠臣とと御答

墨置小平伏て少時涙小れ居る稍有て頭を上帝ハ御安齋心もせ

めとの左大臣殿入政を執行れは僻更多く万隻の祈紹滞りからむ

都鄙の人民歎ずとく者なく我君都出のひ後左大臣殿の命とて御

門人方と流刑小行人と沙汰ありれ左府の御舎弟大納言忠平殿

茂練止られひひ由其儀止ひも御門人達も其より後難を怕とられて御

其姫君の御訪小参らるく今も希く小かり行只彼大納言忠平殿の折席小

音信の使者とさ越れ御臺所中君小御別あてより昼夜御歎深

終小御患病小くづひの良医の配剤も其強かく去ぬる正月十三日の夜景

我御枕頭へ召れ御香が香裏へと把出させのひ。筑紫小在と我君へ妻が  
記念小御覽せよとせと曰ひ姫君達の御更をもせよ小御遺言かいたすの  
其曉終小眠もさく御終焉かゝのひのれもへ御葬式をな果姫君達へ御  
一門方へ預けまわらせ漸都を發足仕り只今テ余著けいと言上涙をさく御遺  
物の品々我呈しを。菅公御覽し愁をさくと御落涙すりくると忠臣辰  
音春彦們又さき御中と推量進言を吞で悲泣する。菅公氣と厲し  
かひ你們愁傷する更勿と生死素り天數かゝ。妻の死没も悔小足す只幾く  
しれに王上御年若く佞臣の言を信じゆい左府時平小政柄を執せり。下民  
の愁ひ朝家の義とや威めん古人も習すや悪人を國の害浅く佞臣の國害深  
く。とさ。聖明の君の時平小政を委ねて遂小不徳の君とや称られん。噫  
是も天かり命たり人力の私をて奈何ともす。守已平くくと忠臣小向ひのひ

你の辰音と俱小都歸り。残る女どもの心抱せよ。且此一終と予を配所小金守詩  
文なり持くり申納言長谷雄小達せ。即ち長谷雄へ遺言を消息入道と  
一齊世の宮大納言忠平へ呈する書翰を封中。小筆よりとて差出しゆい。ね  
忠臣の辰音の大言。致した忠臣先中。御旋え。さき。の。怨多。く。の。御。臺  
所御遊去まりくると。姫君達へ御親族方へ預置。其君の御先途を見届  
ち。ん。め。下。向。仕。り。を。此。御。使。ハ。余。余。付。ら。れ。其。ハ。御。膝。下。小。右。使。せ。り。又。命。り  
願小辰音の言を。某身不肖小いも君都と出ゆい。時より隨從仕り。今  
日。で。仕。ま。り。小。君。先。頃。より。今。以。て。御。不。例。小。右。を。見。捨。ま。り。今。手。割。  
歸り。い。れ。只。此。終。小。右。使。せ。り。と。致。れ。願。れ。も。敢。て。許。さ。ま。ず。你。們。が。中。地。埋。小  
似。れ。も。予。が。病。中。今。稍。治。り。て。治。す。小。程。あり。閑。暇。の。配。所。給。仕。ハ。春。彦。入。道  
妻。足。た。ん。數。多。の。女。も。母。を。亡。ひ。て。便。か。く。と。思。つ。め。を。忠。臣。入。道。へ。小。使。入。道。へ。小。使。入。道。へ。

此封物を用ぬ小於永く主従の義を断せりと平且温順柔和の菅公由言厲  
しく曰ひ多れを兩人も其嚴威小怖且再び御辞退中上之吏能く不本意お  
己吏を得ず領掌一多。菅公色を和げの御一門方姫君達への御傳言と言  
合の御暇を給々多。嶋田々只拜辞と春彦小後の吏もとより頼かれ  
御封物と持して遂小力なく仕筑紫を去て都へ上り多。

因小曰此時兩人小渡一の御草稿ハ昌泰三年八月家集を献り  
後配所小あり多時までの御詩集たり。菅家後集とも菅家後  
草とも号て一卷あり其中三十八首ハ筑紫へ赴たのへまでの御作なり  
菅公天拜山祈願并薨去 渡會春彦忠實并去條

嶋田忠臣田口辰音己小筑紫を去く都へ上り多後ハ菅公御居室小篋  
り何久あむと細密と一書と書紀のハ春彦小命て彼飛梅の新枝と枝

折とせ其小右の書物を採りし借一七日の間齋しめて後春彦小向ひ予深  
た心願有て且より近た山小登り。七日の所天小祈を欲せり最一七日の間祈食  
あれを食物を運小不及敢て你山小登来る吏勿れ仰えを春彦大小泣きて  
中や。御旋小てハの時今二月の半まで然も余寒強く小御不倒り御身小て王  
日の内祈食しめて山中小御筆あらん吏御身小宜し多。何吏の御祈願  
り存小のどの今暫く春暖の時節小及びいよ待せり其内小御患病由治  
日小と練もり多れ。菅公敢て用ひむを是你が知所小あり。満願の後予細  
を語とす。祈願の内決と登山小不許り。此言を用ひて登山せし予が昔  
心画餅となり願望不叶然と予山中の岩小首と觸て死をを構す。予が昔  
志却すの吏勿れと強く緘めり。予多。春彦深く悲しむ。曰上六御願の満りて  
登山致す。予くんと領掌中上多。菅公今ハ心易しと思召。淨衣と著換。予の

新枝を携へて配所をま出りおど春彦、覚束なく其山の麓まで日連りて強て随従しうる。菅公も二座の高山の麓に到りて春彦を顧みては是より還り予が留守と備よ先中もやせせと七日満すまで登山せせと緘めぬ。袂を分ちて只脚入山路を分登りゆひる。春彦脚背影の見ゆる限り見送り進せ心恍惚とて山上を又上停まれば。脚絨強れ山に登る更熊と為方ちく心あらずも配所へ歸るとも君の御身の上を煩想て起居安うす。夜中枕就ぬ目も合ど終夜耐くとして夜を明し。明きと又彼山の麓に到りて脚姿のよる更もやとて東西南北と路も無山下と面りれば。脚姿を幽むるも更熊と十針尽て配所へ還り。又氣遣いさ山の麓に到り。如此七日間往及敷面心を勞する。去程小菅公六險険する羊腸を分登り幸て山頭へ到りて一塊の巖の有れど其上へ登りて推し入る所の新枝小棟願書天小捧りて脚足の左右の大指むらうりて翹るひ

暫く天を拜りて其後脚眼を肉心不乱祈りて何隻の脚願ふいざ不知とも。菅公天性虚弱く在る所新食不飲してさる巖頭小翹ち七日七夜を同利耶由解怠なく祈りて更実小難中の難おて勇猛強勢の荒行者たりとも半日も堪る更難る座し。くる丹絨を高天も感れりひる七日満むる曉天地俄に震動して雷電鳴閃くと等く一陣の旋風吹来り。捧りて告文を天上遙か吹上脚手小梅の新枝のど残りたる。菅公脚喜悅斜あす。今こそ道真が大願と皇天納受りりりて天小向ひて九拜りて巖を下り林下下りゆひる。山下の渡會春彦疾りり待りけし更あれを大系怡び其脚安昧を賀し。随従して配所へ還り脚湯漬か入動め。もれも菅公此も用ひかむ。脚纏の上小脚ひも急急とて眠かて去りて。ひる時八是延喜三年二月二十五日なり。春彦斯もあらず脚疲勞れて脚纏ひしと心得其後脚傍小直宿したる。日暮夜も初更お及ぬ。起むられを余り小

菅公六險険する羊腸を分登り幸て山頭へ到りて一塊の巖の有れど其上へ登りて推し入る所の新枝小棟願書天小捧りて脚足の左右の大指むらうりて翹るひ

不審とち怖多し御枕頭へ膝行して窺ふ御寐息もあらずと大弐綱りて  
御手と採て脰脈を御手氷のぞく冷き六脈已に絶むるを茲に於て發せし  
て驚た強だ急にお下僕を呼て郡司民部が郎令とせ斯と報せし民部  
も大弐發た醫師を引將て馳奔り茶湯を用ひて百般扱ひしれども再び蘇  
生のあらずもあらずを衆一同涙の涙を灑た只歎息とをわたり行りて春  
彦八月日も憑きなり公別を進せ愁傷一方あらず我を忘る声を放て慟哭し  
るると民部是を練諭し先急使を仕立て菅公御薨去の由京都に往進し諸御  
棺の収り御葬式を整へ御棺と車に乗せり御葬の地は太宰府の四堂乃側と  
定め配所を出し御車は春彦付添入の下僕是を御民部時負とせ勢  
介て御車の前後と發言固し四堂を臨で送りたる也菅公薨去の由いり申す  
言傳るともなり遠近の人民々々知て悲泣せざる者なり御葬式を拜せんとて路乃

両側小群集涙を流し佛名を稱て拜する斯て御車と押往とて申す申す  
て御車止りて此も動ず是は何なるも也と勢の者力を併しと押とく大  
般石の地より生じたりす申す動されを春彦民部と相議し御車の此地止り  
此地お葬まよとの御妻あるなりとて遂に御車の止り地おと葬り申す今  
神廟の地是なり斯て御葬式も相済され民部は従卒と將て歸り菅公従  
ひまろて筑紫(下)四の下僕中已に故郷へ歸りたるも只春彦の御墓の側  
小菴を管し喪を籠りて朝夕御墓を掃淨め水と手向はれを供じ死す事  
生ふ事如し郡司民部其誠心を感じ米薪を贈りて飢渴を扶けたり彼孔子  
の子貢も孔子の家を守りて家の土を盡さる也六年我朝の良岑宗貞由仁明帝  
陵墓を守る也三年人にて其忠悌と賞美せり渡會春彦布是木の先哲也  
其身菅家普代の臣也あらず菅公御誕生の始より筑紫に於て御薨去あり

まで昼夜勤作し猶御墓を守りて盧する。翌一年延喜四年二月廿九日、公  
一周忌の御命日、當てさして病、滯るもわく。沐浴齋戒し、中臣の杖を拜し  
安佐とて卒去り、行年八十五才とす。後神祇祝の菅神の撰社とす。  
白太夫の宮、此春彦が妻なり。緘、小布代の一人なり。

因、曰、菅公の天を拜し、山、天、人、天、拜、山、と号、彼、岩、を、天、拜、岩、と、縋、り  
寛平法皇築雙岡、法性坊、夢、調、菅、公、亡、靈、餘

惜哉、北、関、乃、春、の、花、不、歸、水、亦、從、て、流、奈、何、せん、西、府、の、夜、の、月、不、露、して、虚、名  
の、雲、亦、入、さ、り、朝、廷、の、忠、臣、と、呼、れ、り、右、大、臣、菅、原、道、真、公、五、十、九、才、あり、て、如、月、の  
梅花と俱、散、て、西、府、の、土、亦、帰、り、一、更、早、く、都、の、安、を、一、姫、君、達、の、御、愁、傷、を  
中、中、疎、り、て、御、一、門、を、首、無、縁、の、月、御、雲、客、數、あり、ぬ、市、人、農、民、と、て、老、と、た、り、  
わ、と、た、り、惜、み、歎、か、る、ハ、無、二、と、多、く、只、時、平、方、の、輩、ハ、菅、公、の、左、近、思、免、乃、

飯、洛、あ、を、流、奏、の、罪、露、見、如何、なる、御、延、言、を、蒙、り、も、量、じ、と、皆、安、れ、心、の、あ、り、  
々、の、心、已、の、流、紫、亦、て、盡、去、あ、り、と、時、平、も、先、定、國、以、下、の、奸、徒、目、の、上、の、滔、と、流、  
し、心、地、と、大、小、恰、び、始、て、托、を、高、じ、各、奉、會、て、酒、宴、を、催、し、賀、を、演、て、を、樂、ま、る、  
茲、小、寛、平、法、王、守、ま、先、小、菅、公、の、左、近、を、中、省、人、と、御、興、也、兼、す、御、参、内、か、り、ひ、小、  
奸、臣、們、亦、妨、げ、ら、れ、り、て、本、意、を、還、御、か、り、ひ、後、世、成、憂、と、の、小、思、召、々、と、さ、ら、  
菅、公、終、小、盡、去、あ、り、と、ま、せ、の、ひ、て、恐、妻、也、御、衣、の、袖、を、哀、涙、亦、浸、り、ひ、ひ、と、時、平、  
以下、の、逸、者、を、恨、み、惡、し、の、都、の、方、を、見、も、嗔、嗔、の、種、なり、と、思、召、仁、和、寺、の、前、小、山、を、築、  
う、せ、の、ひ、り、其、築、山、二、峰、か、り、成、公、と、世、小、雙、岡、と、を、呼、名、り、々、是、仁、和、寺、の、都、の、  
ん、え、が、る、為、の、目、隱、し、か、り、斯、て、法、皇、六、御、室、小、関、菅、公、の、朝、夕、菅、公、の、喜、授、を、示、せ、ま、  
ひ、御、座、の、側、小、菅、家、持、歌、の、書、物、を、置、せ、り、て、御、後、世、の、折、々、是、を、御、覽、し、菅、公、  
小、御、對、面、か、り、の、御、心、地、を、耐、い、り、し、難、有、り、御、更、あ、り、菅、公、の、御、五、

菅公の御五...



菅家御書物と云ふ。菅家の御書物と云ふ。菅家集 和歌 菅家文集 十二卷 日後草 待一卷

菅家万葉集 古詩 御自作 文徳実録 一部

類聚國史 二百卷 文選文集 一部 以上

其後法皇朱雀天皇の承平元年七月十九日仁和寺に於崩御の御時

崩御の後八世入御室御所の妻と御門跡とト云ふ是ハ御門跡と言ふ事なり

因小曰後代小至てハ門跡を官名の如く言わ 後年追々門跡と稱する官方

敷増たり其大略を

叡山三門跡 妙法院宮 青蓮院宮 梶井宮

三井寺二門跡 聖護院宮 圓滿院宮 實相院宮

東大寺門跡 勸修寺宮

奥福寺門跡 一乘院宮 大兼院宮

醍醐寺門跡 三寶院宮

右の外 大覺寺宮 安居宮 竹内宮 智恩院宮

関東日光宮 等其餘數多有又准門跡と稱するもの多し略之

菅公御薨去あつて後天神地祇朝廷の忠臣の寛死を怒りいひて洛中洛外

厄難數度小及び古語の「夫怨を三年登と一婦恨を百日雨降」と綴り

是乃万物の長と生靈を普まあむる事を天地も小怒りし故に況んや菅公の

如大賢人を困らせし於て先其初を延喜七年八月九月雨月小洛中洛外の

神社佛閣の境内小植する梅櫻桃海棠と首と山吹村若以下の草花小いる近悉く

花咲くを是ハ珍しき事とて貴賤も老若男女の差別なく群集して是を見

回り々る心ある輩眉を蹙り例年飯味とりし手妻の更あれと是ハ夫と妻



変り秋の半小緒の草木（ささげ）一（ひと）花咲（はな）更前代未聞の珍（うつくし）更（ま）なり。此未何なる世（よ）の  
往らんと私（ひそ）語合（か）り帝（みかど）も發（た）たひ天文博士陰陽博士（てんもん）亦（また）考（か）させる（し）不（な）何（な）方（は）  
由（よし）重（おも）た御（ご）慎（ちん）ふて殊（こと）小公卿の中（ちゆう）凶（きゆう）變（へん）の（い）由（よし）と（と）勤（きん）文（ぶん）を上（の）りて（を）奏（そう）言（げん）られ（ば）王（おう）  
深（ふか）く（お）怖（おそ）れ（い）宸（しん）襟（きん）安（やす）ら（ず）ず（と）緒（よ）寺（てい）緒（しよ）社（しゃ）小（せう）須（しよ）命（めい）ありて（を）災（さい）災（さい）を（を）儀（ぎ）を（を）加（か）持（ぢ）祈（いの）禱（たう）  
を修（しゆ）せ（ら）ち（の）ひ（ろ）ろ（と）其中（そのちゆう）中（ちゆう）も（も）睿（えい）山（さん）の（を）法（ほふ）性（せう）坊（ぼう）尊（そん）意（い）僧（そう）正（しやう）と（と）智（ち）德（とく）兼（けん）備（び）乃（な）名（な）  
僧（そう）小（せう）て（て）天台（たいたい）止（し）觀（くわん）の（を）真（ま）旨（し）を（を）究（きゆう）三（さん）學（がく）三（さん）論（ろん）ハ（ハ）不（ふ）及（じやく）一切（いっけつ）緒（しよ）經（きやう）の（を）深（ふか）理（り）小（せう）通（つう）せ（ら）る（所）  
も（も）無（な）り（ら）れ（ば）一（ひと）山（さん）の（を）僧（そう）徒（たう）推（すい）尊（そん）と（と）山（さん）門（もん）の（を）学（がく）頭（とう）と（と）帝（みかど）も（も）深（ふか）く（お）御（ご）信（しん）仰（やう）在（あ）り（て）天台（たいたい）座（ざ）  
主（しゆ）小（せう）任（にん）の（を）今（いま）度（たう）第一（だい）番（ばん）小（せう）消（しやう）災（さい）の（を）加（か）持（ぢ）を（を）修（しゆ）す（が）ら（ず）と（と）宣（せん）旨（し）と（と）下（くだ）され（る）此（こ）僧（そう）正（しやう）  
菅（かん）公（こう）と（と）師（し）檀（だん）の（を）睦（むつ）ハ（ハ）深（ふか）く（お）公（こう）の（を）御（ご）在（あ）り（て）勤（きん）中（ちゆう）互（ご）互（ご）往（わう）及（じやく）と（と）待（まち）を作（つく）ら（せ）る書籍（しやく）の（を）討（たう）論（ろん）  
など（な）は（は）仕（し）合（が）の（を）ひ（ろ）れ（ば）菅（かん）公（こう）の（を）左（さ）遷（せん）せ（ら）れ（ば）ひ（ろ）と（と）且（かつ）又（また）致（ち）され（ば）ひ（ろ）何（なに）卒（そつ）折（せつ）を得（え）る帝を  
中（ちゆう）若（わ）の（を）菅（かん）公（こう）の（を）左（さ）遷（せん）思（し）免（めん）を（を）願（ねん）ひ（ま）すと思（し）ひ（ま）すと終（しゆう）者（しや）朝（てう）廷（てい）亦（また）充（ちゆう）満（まん）て（其）

便（べん）を得（え）るす後（ご）小（せう）年（ねん）月（げつ）を送（おく）らる内（うち）終（しゆう）小（せう）菅（かん）公（こう）薨（かう）去（き）り又是（こゝ）に僧正（しやう）哀（あい）悼（たう）の  
涙（なみだ）小（せう）衣（い）の（を）袖（そで）を（を）絞（しぼ）りひ會（かい）者（しや）定（ぢやう）離（り）の（を）理（り）と（と）觀（くわん）ト（ト）せ（ら）る亡跡（しやく）を（を）吊（たう）ひ（進）せ（ら）る朝夕（てうしやく）  
妙（めう）經（きやう）を（を）讀（よ）誦（じゆう）の（を）ひ（ろ）る小禁（きん）廷（てい）より災厄（やく）消（しやう）滅（めつ）の（を）加（か）持（ぢ）を（を）修（しゆ）すがらずと倫命（りんめい）下（くだ）り  
僧（そう）正（しやう）勅（てく）命（めい）小（せう）從（じゆう）ひ（別）所（じやく）の（を）菴（あん）室（しつ）小（せう）因（いん）菴（あん）リ丹絨（にんじゆう）を（を）抽（ひ）き加持（かぢ）の（を）修（しゆ）法（ほふ）を（を）行（ぎやう）ひ（清）  
して御座（ござ）々（々）所（しよ）一（ひと）夜（よ）菴（あん）の（を）扉（ひ）と（と）敲（たた）き入り僧正（しやう）數（すう）珠（しゆ）の（を）手（て）と（と）止（とど）ま（せ）る維多（びた）と（と）應（おう）へ  
扉（ひ）と（と）開（ひら）けて月影（げい）小（せう）其（その）人（ひと）を（を）見（み）る小宣（せん）旨（し）と（と）去（き）ぬ延喜（えん）三（さん）年（ねん）二（に）月（げつ）西（さい）府（ふ）亦（また）薨（かう）去（き）り  
ひ（ろ）と（と）は（は）菅（かん）丞（しやう）相（しやう）衣（い）冠（くわん）正（しやう）く笏杖（しやくしやう）把（へ）て停立（てい）たり其顔（げん）色（しき）ハ（ハ）稍（しやう）憔悴（せうさい）して  
人（ひと）ん（の）ひ（ろ）僧（そう）正（しやう）其（その）思（し）ひ（ま）すと道（だう）真（しん）公（こう）御（ご）身（みん）ハ（ハ）五（ご）年（ねん）以（もつ）前（ぜん）筑（ちく）紫（し）小（せう）て  
世（よ）外（がい）の（を）ひ（ろ）傳（でん）步（ふ）素（そ）リ師檀（しだん）の（を）契（けい）深（ふか）く御更（ご）あ（れ）を悲哀（あい）小（せう）堪（かん）と（と）せ（ら）る後  
世（よ）佛（ぶつ）果（くわ）を得（え）るす朝（てう）暮（ぼ）御（ご）跡（し）を（を）吊（たう）ひ（小）變（へん）らる小（せう）對（たい）顔（げん）を（を）りしる不  
思（し）議（ぎ）さ（よ）先（せん）此（こ）方（は）と（と）請（しん）入（にん）賓（ひん）主（しゆ）座（ざ）定（ぢやう）りて有（あ）合（が）拓（たく）指（し）を（を）出（い）し湯で進しせ

られ諸今宵何の光臨か... 實の虚名暗む五年以前西府の雲と消五温の形を主中朽果れ... 陽土遺棄す抑道真不敏... 己小亮御代を... 汚名を称れ無辜と父子五所編せ... 肖身の不運不處... 言惑道真を退罪を天帝敢て怒... 佞臣を罰... 了導師を召す... 更かれ此義を告... 了仰らる所理の至極... 天帝佞臣を罰... 了導師を召す... 更かれ此義を告... 了仰らる所理の至極... 天帝佞臣を罰...

まで八堅く辞と下山はる... 且我山王城鎮護の為小支置... 更誰と斯程の理... 再び仰らる御言... 妻戸小と吐け... 正公... 消... 一場の夢... 了仰らる所理の至極... 天帝佞臣を罰... 了導師を召す... 更かれ此義を告... 了仰らる所理の至極... 天帝佞臣を罰...

貝原先生の著され... 天守府天満宮故實記... 菅公の靈... 法性坊の銘...

小つう。我天帝の免を受て雷神とわたり内裏へ落ちて鏡奏せし後を摑殺すと欲す内裏より召さとも師下中の妻を殺れとせられたる小法性坊勅使三度小及たて辞する更熊さるより答れずを菅霊怒りて柘榴の哺と妻を吐けられぬを妻多煙まきりて師瀧水の印を待んで是を消れりとせり書傳されと甚だ信が死絶つておとつ後世の遺誕なぞ。菅公寛のよみ左辻せれども天命あるを悟りて聊も君を怨の言をいさす何と死て雷神邪神と成るよめは是菅公を余小崇令て種一乃其鏡を鏡け邪神とせり妻却て神威を損と理おて最も恐る妻たり。内裏の三度火焼し時平以下の死を善せり。八天道菅公の忠誠を感し竟と雲死無事と露さんよお怖死天火と降し。所おて敢て菅公のたよりお非るを。鏡者の徒雷お撃れ或は死せり。天道悪小殃し。理おて忠臣無二の實公を鏡奏せ罪大ゆして天誅小遭るなり。

是自業自得とてふゆゑのこころのふりよる舟のよむ死妻ふると云。此鏡小公論と緇金。世上の菅公雷神成りしと思入ま。甚だ死僻更なり。予素り具原公初の卓見お仗すとつゝも。茲小柘榴天神の條と載るとの古くより書傳へ人の能知る鏡を身を捨す。八邊系托して穢者の責と塞。洛中天妻内裏雷災。奸徒雷死法性房行カ條。延喜七年の暮月八年の春おたり。れども何の異変あり。是余が加持祈禱乃功カする所なりと上入より下万民まで。我安人々多小其年の秋八月十六日俄お暴風吹出。洛中洛外も大木と根お吹仆。堂社人家の屋根を吹捲り。端々のお家も吹倒さる。もまが加え。大雨降中を賀茂川お洪水溢。川下の人家百五十軒。忽ち水のよめお押流され溺死する者夥し。牛馬雞犬の水死す。六幾千とも數まはす。是然る希代の大變とて上下顔如菜拍惑。所お午過頂より雷電凄く。鳴閃お白。

延喜七年八月十六日 洛中洛外大水 吹倒るる家屋 吹捲るる屋根 吹流るる木石 溺死する者 夥し 牛馬雞犬 水死す 六幾千とも 數まはす 是然る希代の大變とて 上下顔如菜拍惑 所お午過頂より 雷電凄く 鳴閃お白

登まから暗夜のく風雨倍屬く成るを貴賤を魂を消し女眞泣か  
世界を滅し不ろうと危と多。殊更内裏小雷鳴日れて駭く雷の落るを幾所とも  
敷たす。維言出せし。此天災無罪大臣殿を左任去のい。菅公の死。盛乃  
崇然。一の所なりと言置り。百司百官君と守護。も。ん。せ。と。周。障。狼。狽。逃  
強。多。中。小。大。納。言。清。貫。之。管。壺。の。崇。なり。と。定。て。大。系。恐。怖。一。主。上。の。御。座。于。常  
寧。殿。逃。避。ん。後。涼。殿。の。廊。下。と。ま。り。小。眼。前。一。團。の。雷。火。噴。と。落。る。お。と。清  
貫。と。魂。断。て。屍。居。お。と。と。引。る。其。内。小。水。干。の。袖。小。雷。火。燃。付。れ。を。益。發。お。周  
障。火。を。消。ん。廊。下。と。轉。び。回。り。救。つ。と。叫。所。再。び。霹。靂。大。系。震。鳴。清。貫。が。蘇  
の上。小。落。ら。う。何。え。公。で。堪。る。多。れ。首。中。脚。中。切。小。成。煙。り。及。て。亦。多。目。當  
ら。ぬ。風。情。なり。右。中。弁。希。世。周。障。強。死。大。庭。逃。下。る。小。雷。火。の。多。小。負。を。燒。て。介  
死。負。文。の。勇。氣。を。以。て。難。を。遁。と。ん。と。弓。小。矢。を。番。引。張。て。逃。行。を。雷。神。近。付。

跡殺し。多。紀。蔭。連。八。幡。小。む。せ。て。死。亡。一。其。余。時。平。小。味。せ。輩。公。悉。く。雷。の。為。小。聲  
あ。と。一。途。の。思。ひ。と。恐。懼。一。多。く。奸。智。之。面。先。定。國。菅。根。亦。向。以。菅。丞。相。在。世。の  
時。帝。と。重。不。敬。重。人。過。れ。其。亡。靈。由。玉。體。小。近。付。更。八。も。あ。じ。君。小。列。と。い  
て。居。を。雷。難。を。通。る。御。と。言。れ。ら。る。を。皆。亡。と。意。帝。の。御。座。へ。森。と。玉。體。を  
守護。も。ま。と。を。名。く。四。人。も。脚。衣。お。と。り。付。て。戰。慄。多。素。り。雷。火。ハ。菅。公。ハ。雷  
の。為。と。ま。り。あ。れ。の。流。石。善。の。天子。乃。威。小。恐。と。玉。體。小。尺。更。多。く。れ。後。者。の  
面。も。僕。伴。小。雷。難。を。免。多。の。風。雨。雷。電。ハ。尚。止。と。日。小。暮。れ。る。時。也。  
する。人。中。宮。殿。皆。暗。闇。小。只。透。間。が。閃。く。電。光。の。影。凍。り。此。所。彼。所。小。泣。き。下。る。  
上。童。の。声。叫。喚。天。叫。喚。の。地。獄。中。斯。や。怪。し。多。左。府。時。平。心。付。帝。向。ひ。り。床  
山の。座。主。尊。意。僧。正。を。召。ま。加。持。さ。る。天。変。の。止。り。果。小。命。と。羨。し。た。れ。帝。

由其義を立上りて急ぎ勅使を三尊意と招き寄し給命ありき也。左府奉り  
心利なる人を擇と勅使として山門地をとりて。此時夜半曉かきつる時平高僧  
と勅使途中にて遅滞すも更もこと。又續て二番手の勅使をまされしむるも向  
心安堵す。冬引續て三番手の勅使を馳向せしむる。去程一番の勅使は風雨  
を犯し秣馬小鞭を加て秣如く。摩山庵著法性坊より勅命と述て急ぎ奉内  
あつと急ぎしる。是より前小尊意僧正浴中の天変を定て去年の夢を思  
ひ合ふ斯て。秋廷より勅使を来として召召。然も夢中かき。菅公ふかひ  
初めあれを二應の御名あを辞退して下山はと。菴室小園筆毫で御座る小果  
て其知三朝遷しく勅使入来ありて火急に奉内。夫妻の鎮るや加持せしむると  
倫命と傳て下山を促しる。僧正應て老僧頃日所勞ふて此菴室小引筆毫の六下  
山より難く。然も勅命と黙止をせしむる。此菴室小雷雨を鎮る。勅使

しい。此旨田奏してありしと。されし勅使推及し。御所旁と山を二應の御  
辞退する更ふいとも。今度の天災は尋常の義あり。故に此系して。亮せられ。菅公  
の宗あれを。自他とも僧正を伴ひし。是もその勅使小。御座煩あが。是非も小  
却奉内あれを。小僧正猶辞して。菅公の宗もあれ。天帝の処も小  
あれ。拙僧が。修法して止むるを。内裏にて修するも。當山小。修すも。何れ理あり  
先々御還有て可也。奏聞し。て。敢て下山す。せ。体。見え。玉。され。勅使。憫。して  
是ハ奈何す。能れと。當惑あり。内。又。三番手の勅使。混。沾。成。て。近。著。奉。内。と。促。す。更  
△前の如く。されも。僧正。先の。と。曰。て。下山。を。固。辞。せ。し。る。内。間。も。ひ。く。三。番。手。の。勅  
使。急。ぎ。て。菟。著。奉。内。を。乞。更。頓。かり。僧正。勅使。三。度。小。乃。上。六。辞。す。る。小。詞。ひ  
此。上。と。て。先。三。入。の。勅使。先。立。其。身。の。車。小。乘。て。摩。岳。を。押。下。ら。せ。鴨。川。に。一。散。小  
押。行。り。の。ひ。る。小。早。鴨。川。を。洪水。漲。り。水。勢。岩。を。溢。す。む。り。て。白。浪。平。右。持

と船小も猶涉がく見えたり増て馬車にて越へて舟を舟にせりふれを三人の  
使中頼光とて手綱をひく車と推入夫の水勢を辟易し互に面を見合て新  
とと圓なる僧正御覽とて些中怕る色なく人夫の中向ひ你亦患もまぬ我路  
を用た得ずる。只水中車を舟に三使の車の後小續たりとて車の内にて見  
絡成唱(印)と結りて奇あらうも漲り溢り川水忽ち兩段小合と中小條の  
陸路開けり。衆人は是を見て噫と感賞。実奇特の法なる帝の御信仰在  
すも理りかると。勇成生車成押まると。勅使感嘆し續て駒を進り上下も  
安く川成越果れ。後八回の大川となり白浪高くと互に多。斯て僧正御内ありて  
玉座進く膝行し先玉體の御安泰と祝され頓て水晶の珠數をとも大威徳の  
法を修りて不思議や今迄鳴内き雷電忽ち遠去り。遙か紫宸殿の上小鳴  
真死る。是亦依て主上より睿慮を安んじ。時平公下も溜息吐て蘇生する心地

せれり。去程小尊意僧正猶も雷災を鎮んと紫宸殿へ入りて祈りて雷を清  
殿の上小鳴清涼殿に降りて修法あれ。梅壺梨壺小鳴夷於七十二殿十二坊を連  
回りく根限小を祈りて多。主上菅公と左遷りて一更と深く御後梅在り菅  
丞相及び子息達の左遷二件の書物取出せせて悉く焼捨させり。編罪思免の  
勅宣を下され且左大臣小増官なり。るを倫旨と賜りてこれを雷神も是亦依て怒  
を和げり。漸く風雨収り雷鳴も止る。君を首もり公卿大夫下官とて漸  
心成安んじ。互に恙あれを相賀り。尊意僧正猶も災変と儀を内裡小當り  
て祈の檀を被け七日の間秘法の加持をせ修せられ。時平患奇病瘳去。光定國菅根変心洛中洪水條  
本院の大臣時平を先と。光定國菅根本の輩已小天雷の為小股殺さる。小王  
上小咫尺もより小依て不思議の命と助り。且法性坊の行力左遷思免の



天変鎮りしを。列位安堵の思ひを。今更菅原を省人。帝の奏。入の子息達の流罪を思免在て都徴還し。勸も。即ち左遷の國。思免の宣旨とぞ下され。御土佐國へ左遷せし。長男右大臣高恒佐渡國へ流され。式部大臣景行濱岐國へ流され。三男藏人景茂以上三人皆其國の配所にて御述去あり。本官に還し。猶官一階を加。六伊豫國へ流され。四男秀才敦茂の存生。於浴あり。菅原の名跡を嗣。斯て其年。暮明。延喜九年三月本院の左大臣不斗奇病。津次第小疾病。奇病と。夜夜。悶れ。御基所を首。御内人親族方。大少。孩れ。良醫。委て。醫。療。手。て。緒社の神官緒山の僧。命。ど。加持。祈。禱。遺。る。所。か。修。せ。め。ら。れ。る。も。雲。計。中。強。か。漸。小。形。容。瘦。衰。果。癡。狂。多。須。波。す。菅。丞。相。か。来。り。て。予。と。將。行。人。と。す。る。息。今。雷。神。か。予。と。曳。列。衆。人。と。す。る。八。か。ん。と。雷。言。を。殿。中。と。東。西。南。北。と。凡。回。り。す。

聞られ。是。真。の。菅。公。の。西。亞。の。崇。と。か。り。の。ふ。あ。ず。自。身。我。と。求。り。奇。病。を。其。故。を。去。年。大。内。雷。災。の。砌。心。小。菅。公。の。崇。な。り。と。思。ひ。恐。怖。の。念。骨。髓。の。微。り。其。後。八。昼。夜。菅。原。を。怕。り。念。止。時。か。遂。小。奇。病。と。成。る。乃。彼。不。中。小。蛇。有。と。思。ひ。心。小。病。を。生。下。角。弓。の。時。繪。の。影。な。り。と。受。て。宿。病。忽。ち。愈。し。と。曰。り。理。也。愈。ち。自。身。も。想。下。り。生。ぜ。病。な。る。と。覺。ず。増。て。余。人。を。猶。公。の。崇。か。り。と。思。ひ。結。此。六。當。時。無。双。の。驗。者。と。安。え。淨。藏。貴。所。を。請。じ。加。持。ま。せ。む。死。心。靈。の。退。散。す。る。更。も。有。べ。と。淨。藏。貴。所。を。招。じ。請。じ。左。府。の。奇。病。平。愈。の。加。持。を。修。せ。り。此。淨。藏。貴。所。と。三。善。清。行。の。息。男。を。幼。稚。の。時。より。佛。法。心。を。傾。け。出。家。し。て。普。く。經。論。を。學。び。究。め。行。德。衆。小。勝。と。二。年。都。八。坂。の。大。塔。正。正。に。藏。思。比。沙。門。天。の。法。を。修。し。て。是。を。祈。ら。れ。る。小。一。夜。内。小。塔。の。正。整。り。多。り。其。法。力。を。感。心。賞。り。多。り。各。僧。の。丹。誠。を。抽。て。加。持。せ。れ。る。更。大臣。の。狂。

右之申分を披露  
△申之有るは  
又し申すは  
くわのゆ

次第小鎮リ狂ひ回らるる更止れを館の上下稍心を安んず。淨藏の行方不詳の  
しを思ふる。されも天の責る所の患病あれ。左府の身體瘦衰、飲食便中  
り病床にお臥瘞の喚く如く喘れる。淨藏は昼夜加持の檀小在て法華經を續  
編せしるる。余の舌の乾たれ。湯と飲んと皆く経を續止まら。時小大臣の左の耳  
乃孔より青白色の小蛇三寸許首を出り舌を内りて座中に見回し。是を足て侍寮  
侍る女房近習們大衆後れ皆身の毛と堅二回ともふる者なり。鬼首成て戦慄  
々。淨藏も發熱ふる。道德勝より勇猛の僧あれ。此中怖ど又法華經を  
續編せしるる。蛇は耳孔へ退入り。是より淨藏一口も續編を止られ。件乃  
青蛇耳孔より首を出り座中に見回す。更前のてく経を續を退入編止を出り  
小とさりの淨藏も慄果根氣を疲しとてあする。小逐小時平大臣蛇の出初  
一日より第三日小大臣煩悶し虚空を擲て狂死せし。天四封の程ぞ恐るる。

時小年齢二十九才とをばえし。御臺側室の悲歎はる更なり。子息八条大將保忠  
口中納言敦忠其餘の二族縁者の令悔と歎けも歸る。死道にあはれ。泣き死  
棺小収り送葬の管代執行ひ一堆の塚の主とをかり小る。斯て初七日も成れ。御  
臺所を先より子息保忠敦忠其餘の女房達雜掌二口の人小る。追唐参せし  
れ。小墓の上小五尺余の青蛇蟠り居て人の面をふらう。あつた。呼吸休たれ  
む。女流の輩ハあふやと云きうて袖を覆て逃出る。あつ。伏侍あり。保忠敦忠以  
下中大臣發死。惘惑へり。只時平の舎弟大納言忠平の勇氣ある。小て此中  
動せむ。武士小指揮と蛇を取捨させし。せし。小蛇。已と這去て更。行方を  
すかり。是小依て各唐拜終り鐘歸れ。二七日及びて又皆唐榊唐  
せし。小此度も墓上小蛇の在更前のて。去る。先日より。稍長大なり。蜘蛛リ  
居る。小。女性の面ハ小前小信と發死。怖ど。此後ハ唐参す。女性ハあつる。

三十一 己酉 小



筑紫  
太宰府  
天満宮  
圖



ところと不知世人皆菅公の崇なりと思ひ吉と云ふと相合たり加支あむ時平乃  
子息保忠敦忠兩人の奇病を患て死に當り時平の妹の女御隠子の患病  
小依て豊死のひも續て春宮保明親王の時平の甥の病死かひひる小と帝の御教  
大方も是も菅霊の所為なりと思召返さるも菅公を左遷しひ一吏と御  
後悔在り筑紫へ勅使を下され菅公の霊を宥られん正二位の宣と贈りひ神小  
鎮祭り大富天神と神号と賜りける也も天帝の怒尚止まり延喜十四年  
甲戌三月下旬洛中小火災發り上二条より下五条まで東八川原より西大宮通まで  
一田中焼亡僅小内裏の焼残るも内裏より上の人家も残少類焼三日三夜の  
間火鎮ららず小廣の平安城中忽ち赤土となり公卿殿上人住家けりすや  
武士市々山林へ逃入る近國へ逃行ゆ多親を失ひ子とをばる夫を人疾ひ  
妻小別と尋ひ迷ひ呼きぬよ光景阿鼻焦熱の地獄も斯やと怪まれぬ是と

下  
さへ希代の大變を怖る所小年二月初旬より大雨降續た白昼の  
昏の如く市街は春の大災小家造の間租の任住居あれを雨の不滅家の  
なく大の困り果る小稱中句後雨止天齊なる少一心を安する間も  
忽ち賀茂桂木の太川より洪水溢て洛中水の深たつ八尺余小水勢家  
を漂り木竹木と押流し水の来る更の許なく疾く名を牛馬雞犬を  
ひを更かり老人女小兒のひ水漂ひ流し溺死する者何百千の數をまらず  
野武士強盜の混雜騒動の紛小乗の金銀財宝衣服亦と奪ひ掠て逃まり  
官より小狼藉をも防たる暇もなれ其錯乱筆紙小難し過水小流れ  
ざる家も床より上へ四五尺水築れを展風復も活爛と障子も壁も骨  
むろと成家内の男女八屋根の上へ逃上り炎天小照蓋れて大の苦暑小  
て疾を發するも少らず春の火災といひ又此水難小遭吏前代未聞の災ふ

その如何成行世の中を。時小古の空海和尚の如く名僧あり。火災洪水  
を由法力を以て鎮めしむる。今の世の僧、官位を厭ふ。尊けふ足らぬ。此の  
行防ぐ程の名僧もなると云は合々。小遂小其風範大内へ。空海が著述せし  
書籍何れも。官庫へ納む。勅詔下り。臣下奉り。東寺の僧侶  
小宣旨の趣を傳へ。山奉て喜悦の眉を開け。真言宗の美目。是れ小過  
ごとく倉庫に搜り。空海師十八の時述作あり。三教指歸を先く。代  
の著書。貝玉造と題せし。假名草紙より輯て是を献り。依其書。空海  
朝廷の官庫へ納り。めむひ。吾朝の名僧。妻れ中。如此上天子より下。万民  
小の。迄末世の今も猶尊信する。空海和尚の法徳。又類ひたり。菅公  
贈官賜神号。延喜帝御讓位四海太平條。延喜帝菅公の宗と鎮む。人爲小空海和尚の策文を不遺大内の文庫に

納り。めむひ。猶世上穩うあき。延喜二十一年。小空海和尚弘法大  
師と謚を賜り。年号の延長元年と改元。のひ。同年三月。洛中大地震  
一就中。五条より下。南北三十余町。東西二十余町。間人家を揺崩し。神社佛閣を  
傾覆せしむ。按る。是れ先年の天災の時。焼残し。所から。不思議なり。其物音の  
凄。紅。更。世。界。も。滅。却。す。と。疑。ふ。れ。老。人。小。兒。婦。女。の。逃。後。一。輩。ハ。厭。小。股。半。を。棟。柱  
の。倒。る。小。中。で。死。亡。す。者。凡。三。千。余。人。及。び。小。の。疵。を。蒙。る。者。ハ。幾。万。人。と。云。は。限  
か。是。れ。菅。公。の。怨。靈。の。祟。なり。と。言。觸。れ。た。れ。主。上。に。勅。使。て。筑。紫。太。宰。府  
へ。下。し。の。菅。公。廟。を。新。小。修理。せ。し。む。八月。四。日。初。祭。禮。を。執行。し。て。此。の。例。年。  
年。解。忘。り。祭。禮。を。執行。せ。し。む。勅。詔。あり。る。也。此。年。と。始。て。例。年。と。爲。す。其  
行。れ。る。時。勅。使。神。殿。小。昇。て。拜。礼。敬。ひ。て。宣。命。を。續。上。せ。し。む。其。其。中。の。詩。文。字。解。鮮。ゆ。ん。え。り。社。司。大  
前。一。面。の。瑞。石。現。れ。面。玉。盤。の。く。く。石。面。小。七。言。絶。句。の。詩。と。文字。解。鮮。ゆ。ん。え。り。社。司。大

よ建た勅使斯と言上りし勅使の奇異の思ひを社参りて見續けり  
昨為北関被悲士上 今作下西都雪耻尸  
生恨死歡其奈我 今須望足護皇基  
とあり勅使此奇瑞を見て感涙を流し偕菅靈怒を鎮めりと深く神徳を仰  
た敬して都を還上りれり

因小曰其後一条院の御宇正曆年中菅原為理を勅使して菅公正二位  
太政大臣の官を贈りて天満大自在  
より緒國とも漸く小社を建木像を彫り或畫紙かごとて敬ひ奉る所敷き  
都北野の天満宮其始天慶五年七月十二日西の京七条小住綾子と云  
女小菅神御託宣なり予昔世存在と云む北野右馬場小遊  
浴の中小閑勝る地彼所小如た勅勸を受所府の雲と消るらくとも

一念の靈折々筑紫より彼所行通ひて心を慰りて你右近の馬場小社を管  
て多寄便を得せりとの告りし綾子難有妻お思ふも其身賤く貧  
乏を右近の馬場小社を建る更能くは只柴の菴のわたり小舟は又祠と  
瑞籬を結び五年が向崇奈りたり其間小菜種供物は献りて更有これへ  
今以て例年二月二十五日小菜種の御供の神妻あり其後天慶九年江洲平野  
社乃神職の男太郎丸とらる者小菅神御託宣なり御北野右近の馬場の辺  
一夜小千本の松生ず是に居する地なり你都西の京か綾子と叫ぶ女  
小力と添彼所小社を建ると告りし多も太郎丸又不思議小思ひ都へ上りて右  
近の馬場へいりて小土人群集り此地前宵一夜の中小松千本生出り世の不  
思議ある更うかごとく小噂する小太郎丸が託宣の事明を感下西京  
ある綾子が在家尋行對面して互小神託の趣れを悟合し小相議りて大内菅

神の御託宣の始終を奏聞し、右邊の馬場御社を御造  
管在て綾子家の小社を迂り、今北野の天満宮是なり。彼一夜の中  
千本の松生ず、地を今小千本と習り、又浪速天満の天神の御社、村上春登の  
天曆年中菅神の御神託依て社を御造管あり。河内道明寺の天満宮の日  
ト頃御社を建られ、其他諸國津浦まで此神を崇奉する所あり。神威  
の物益ちる、更兼小日新小日新中上天子より下億兆の庶民を尊信し  
まうと、祈願して成就せしむる。仰ぐ尊むる。  
去程小勅使、太宰府より帰洛し、泰内太宰府の神前小磐石の詩出  
現せ、奇瑞を奏聞せられ、帝睿感斜あり、思召し倍信神、由信仰  
在り。斯て後、天神地祇も怒成和げ、いんせ上總のかり、上下心と安  
んじ、小延長三年六月、主上御滝瀆を患せ、諸王公卿大

也 皆是虛言

疾、是中又管靈の崇め、あつとて和氣丹波の典藥、小本諸寺諸社、六  
御平愈の加持祈禱を修せし、尚、陰陽頭小竹里、あつとて吉光  
と程、御快復ふさせ、奏し、系より列位を得、んを果して  
醫藥効を奏し、主上御本復在り。是亦、仍て諸王公卿、いんせ更なり、洛中  
洛外の人民まで、皆万感と唱ふ。其翌年、延長四年、大和國多武峯の社を  
御造管在り。是、大織冠鎌足公の廟所なり。鎌足公存せ、御深く佛法  
皈依在り。當所、二基の多寶塔と建す。念持乃舍利を安置し、十二作坊  
を建られ、塔の峯と、呼ぶ。後、多武峯と文字と書更なり。鎌足公又  
曾て我像を描せ、將來朝家及皇子孫の中、變更あり、藤告知、いんせ  
ひ額の血をとりて、繪具小摺交用、眼の儀式、嚴小宮にて、社納り、いんせ  
威あり、未代、いんせ、近國家の事有んとす。時、伴の画像、いんせ



一山鳴動して其凶変を告知し。妻事治る時ハ画像の破裂自爲人合て其の如  
 し。奇特の靈像あれを。朝廷中御崇敬在て今度社及諸堂を修理す  
 金銀珠玉を鑄られ其莊嚴眼を寫さぬ者ハ無リ。曰五年大納言忠平延  
 喜式六十二卷と献られ。是ハ左大臣時平菅公撰。後我ハ菅家小右女  
 友有と世上知れん爲紀長谷雄を相談對人して延喜式を撰と云々。半途ハ  
 時平薨去せられ長谷雄も死没多し。時平の舍弟忠平凡の志及継ぎ。残  
 るハ撰と全部と献せられ。也曰六年小風土記六十卷を撰せり。曰十年小  
 野道風小勅と先年巨勢全圖を畫し。賢聖の障子ハ其銘と書せり。曰  
 内八年九月至上御不例依て帝位を春宮寛明親王に禪の。此君ハ其後  
 とやも御幼推せり。賢君ハ其後藤原忠平左大臣補佐せられ。曰海平  
 皇統記圖會後編卷之六大尾

小て皇統愈万代不易と祝奉りけり

# 書 林

- 京都寺町通佛光寺
- 河内屋藤四郎
- 江戸日本橋通壹丁目
- 須原屋茂兵衛
- 同 貳丁目
- 山城屋佐兵衛
- 同 貳丁目
- 須原屋新兵衛
- 同本石町十軒店
- 英 失助
- 同浅草芝町貳丁目
- 須原屋伊 八
- 同芝神明前
- 岡田屋嘉 七
- 同神田旅籠町壹丁目
- 紙 屋德 八
- 大阪心齋橋通邊勞町
- 河内屋茂兵衛
- 同心存橋通本町角
- 河内屋藤兵衛

